

連載：[海外] グローバル体験

第4回 若い時には、四つのないものがある

研究員 杉本 晴重

20 歳代後半の米国駐在で成長

筆者が初めて米国へ出張したのは入社5年目1974年、まだ20代半ばであった。その後計3回、10年の駐在を含めて、長期に渡って北米通信事業に関係するとは、当時、全く想像していなかった。しかし、振り返ってみると、20歳代後半の初めての駐在時が私の人生においては、一番成長が実感できた時期であった。

当時、北米では規制緩和による市場開放と、マイクロプロセッサと、半導体メモリの出現によるPBX（構内電話交換機）の電子化要求が重なり、新たなビジネスチャンスが訪れた。

若手中心に編成された開発チームが、日本で機器を開発し米国で生産し、販売したが、当初、技術と生産は日本人、セールス、マーケティング、サービスは米人の構成で、新たな技術・商品・市場に取組んだ。しかし、周到に見えた計画にも問題は多く、まずは生産において日米間の図面構成の相違や、部品番号のとり方の相違などから、図面の現地化を急遽行ったりで、製品を出荷すると、今度は市場で問題が発生した。

実は日本人技術者全員、北米通信機器の開発は初めてで、米国のインタフェース基準書を基に設計開発したが、書かれてない常識的なことを折り込めず、設計に不具合が出たこともあった。

しかし、日米間の協力体制で一つ一つ問題を解決し、それなりの経験と知識を蓄積した。当時、メールやインターネットもなく、大量の情報をやりとりできなかった。自ずから現地の裁量、判断が重要となり、我々若手技術者の判断が、製品出荷の可否を決めるケースも多かった。

自分で考え対策は失敗を恐れず

日本にいれば、上司や関係部門と相談して慎重に決めることも、海外の子会社では、自身の責任も重たく、経営に参画している緊張感があった。日々がこのような状況で、とにかく自分で考え抜いて、必要な対策は失敗を恐れず、恥も外聞もなくトライするという連続だった。

この時期を「若い時には四つのないものがある。知識と経験と責任（役職）と恥である。この四つがない内に、思い切ったことをやる事が、大きな成長につながる」と考えている。

ある企業の社内アンケートで「あなたは、いつの時期に自分が一番成長したと思うか」の問いに「20代後半から30代前半で、ある一つの仕事に最初から最後まで関わった時」との回答が一番多かった。同感である。

特に海外経験という大きな変化の中に自分をおくチャンス（場）に恵まれると、誰でも人はそれなりに成長すると信じている。

－以上－